

2019.7.6 (土) 天気/晴れ 参加者/一般7人 (内、子ども4人) 指導員2人 (森功一、辻愛子) 暦/夏至、末候「半夏生 (はんげしょうず)」 観察/ハンゲシヨウ、カタツムリ、バッタ、シャクトリムシ、きのこ、ネジバナ、カナブン、ミノムシ

今回の出逢いは、小っちゃいシリーズだ！カタツムリの赤ちゃん、バッタの赤ちゃん、シャクトリムシの赤ちゃん。見つけるたび、「小っちゃ〜い」と声を出し、小っちゃな手でつかみ取り、小っちゃな手の平にのせて見せる。自分より遥かに小っちゃな生き物を見つけ出し、わくわくしている小っちゃな子どもたちの姿は、なぜだかこちらもとてもうれしい気持ちになる。お次は大きな木の幹に生える青々としたノキシノブの合間からニョキニョキニョキと小っちゃなきのこ。繊細な細い茎と、なだらかなお山のようなフォルムの傘がランプのようでなんとも愛らしい。きわめつけは子猫。お腹がすいているのか私たちがスケッチをしている東屋にやってきて、ミャアミャアミャアと弱弱しい声で鳴く。自分よりも小っちゃな弱き存在は、誰しもほっておけなくなるのだろうか。たくさん話しかけたあと、小っちゃな子どもは小っちゃな子猫をスケッチした。

子どもたちが妖精なのではないかとたびたび感じることもある。昨夜降った雨がクモの巣に残って水玉の粒をホツポツと残していた。木々の合間の木漏れ日が反射する雨粒を見て、「雨のビーズがたくさん！」。そんな言葉を発して何気なく通り過ぎた。なんてステキな表現なんだろう。クモの巣に残る雨粒は自然のビーズなのだ。スケッチタイムのときのこと、なかなか、終わらないわたしを呼びにきた。「何描いてるの？みんな終わったよ〜」。わたしは池の水面に映り込むみどりや青空のスケッチに夢中なことを話した。「見てみて、きれいでしょ、キラキラ映ってて、これを描きたいんだよね〜」。すると、「僕も描こうかな」と、呼びに来たはずが、なんとわたしのすぐ横にあった柵に上りはじめたのだ。ちょこんと座ってわたしの間近なところにやってきた。「何描こっかな」とさっき見た低く飛び回っていたつばめを描きだした。子ども達はうれしい気持ちにそっと寄添って、そしてわたしをさらにわくわくさせてくれるのだ。

